皆川 唯（人間総合科学研究科 体育学専攻）

道を切り拓く

１．教育を考える一言

どこの大学に入ったかじゃない。その大学に入ってから何をするか。

２．背景

大学三年生のときに、五歳上の先輩から言われた言葉です。

私は筑波大学体育専門学群の出身です。専門競技はスピードスケートの短距離です。高校は地元の進学校に通っていたこともあり、初めは東北大学の工学部を志望していました。しかし、二年生のインターハイで上位の成績を収めたことをきっかけに、今後もスポーツの世界で活躍したいと漠然と考えるようになり、筑波大学への進学を決めました。

入学してからは、スピードスケートの練習に明け暮れました。しかし、大学の授業を聞き進め、自分の進路について考えていくうちに、筑波大学へ進学したことを後悔するようになりました。高校時代の友達が医学部や薬学部、工学部へ進学し専門的な知識を学んでいく中、自分はスピードスケートの練習ばかりをやり続け、将来の不安を感じ始めていました。そんな時に言われたのが、この一言でした。この言葉を聞いたときは、それは違う、入学した大学や学部で決まるんです、と心の中で思ったのをよく覚えています。

３．考察

私はオリンピックを目指しました。大学四年生のときにタイムが飛躍的に向上し、卒業後は一年間実業団の選手として活動しました。その夢は叶わず、現在は筑波の大学院に戻ってきて教師を目指しているのですが、今振り返ると、スピードスケートをやってきて良かったと思っています。とにかく練習が辛くて、遊びに行く時間もないし、将来の不安も重なって競技をやめようと何度も思いました。しかし、とにかく愚直に練習を続けてきた結果、数多くのオリンピック選手と練習を伴にしたり、競技の中で鎬を削ることが出来ました。他の人には中々真似することの出来ない、エキサイティングな六年間だったと思っています。

そんな中、先輩から言われた言葉を思い出します。やっぱり自分はスポーツが好きだから体育専門学群を志望したし、その選択は間違ってはいなかった、と。教師を目指している今、その全てが私にとって糧となっています。結局、入った学部を間違ったとか、大学を間違ったとか、そんなことはちゃんちゃらおかしかったなと思うんです。その大学に入って何かをするのは自分なんだって。

もし教師になることが出来たら私は、そんなことを生徒に伝えられたらいいなと思っています。